

枕草子『春はあけぼの』 定期テスト対策問題（解答・解説編）

解答・解説

1. だんだん（と）・しだいに「やうやう」は「だんだん」「しだいに」の意味の副詞。漢字では「漸う」。夜が明けて少しずつ空が白んでいく様子を表す。
2. 趣がある・風情がある「をかし」は明るく知的に「おもしろい・趣がある」と感じる美意識。夏のほのかな蛍の光や雨に対して、作者が感じた「趣のよさ」を表す。
3. しみじみと心打たれる・しみじみとした趣がある「あはれなり」は、思いがけず心を揺さぶられる、しみじみとした感動を表す形容動詞。鳥が寝床へ飛び急ぐ夕暮れの情景に対する感慨。明るく知的な「をかし」との違いを押さえること。
4. やはり（改めて）言うまでもない・言うまでもないことだ「はた」は「やはり・また」、「言ふべきにあらず」は「言うまでもない（言うのもおろかだ）」の意。秋の日没後の風の音・虫の音のすばらしさは、言うまでもないということ。
5. 存続 ここでの「たり（たる）」は「～ている・～ていた」と訳す存続の意味。「紫だちたる雲」＝「紫がかっている雲」。本文の「たなびきたる」「飛びちがひたる」なども同様に存続。完了「～てしまった」ではない点に注意。
6. 添加（～までも）「さへ」は「～までも」と添加（あるものに別のものを加える）を表す副助詞。「飛び急ぐさへあはれなり」＝「飛び急ぐ様子までもがしみじみと趣深い」。限定の「だに」や類推とは区別する。
7. 体言止め 名詞（体言）で文を結ぶ表現技法。「あけぼの」「夜」「夕暮れ」「つとめて」で各季節の文を止め、余韻を残している。
8. 已然形（になる）係り結びの法則では、係助詞「こそ」が文中にあると、結びの語は已然形で結ぶ。なお「ぞ・なむ・や・か」の場合は連体形で結ぶ。本文自体は体言止めだが、係り結びの基本として「こそ→已然形」を押さえておく。
9. 言うまでもない「さらなり」は「言うまでもない・もちろんだ」の意。「月のころはさらなり」＝「月の(出ている)ころは言うまでもない(すばらしい)」。
10. 早朝・明け方「つとめて」は「早朝」、または「(何かがあった)翌朝」の意。「務めて」ではない。冬は早朝がよい、という文脈。
11. 似つかわしい・ふさわしい「つきづきし」は「似つかわしい・ふさわしい・調和している」の意の形容詞。寒い早朝に火を急いでおこし炭を運ぶ様子が、冬の朝にいかにもふさわしい、ということ。
12. よくない・好ましくない「わろし」は「よくない・感心しない」の意。「悪し（あし）」（＝悪い・劣悪だ）より程度が軽く、「あまり感心しない・興ざめだ」というニュアンス。昼になって火桶の火が白い灰だらけになる様子を「わろし」と評している。

13. 春…あけぼの（明け方）／夏…夜／秋…夕暮れ／冬…つとめて（早朝） 作者は四季それぞれに最も趣のある時間帯を挙げる。春は明け方、夏は夜、秋は夕暮れ、冬は早朝。この四季と時間帯の対応はテストの最頻出ポイント。

14. 作者…清少納言／ジャンル…随筆 『枕草子』は平安時代中期に清少納言が著した随筆。日本三大随筆（枕草子・方丈記〔鴨長明〕・徒然草〔兼好法師〕）の一つで、「をかし」の文学と呼ばれる。一条天皇の中宮定子に仕えた体験などがつづられている。